

# 月報 岡崎の教育



## 12月号

昭和63年12月1日  
発行 / 編集  
岡崎市教育委員会

かまの煙が  
 試験坂になびく  
 深閑とした昼下がりに  
 野鳥の声に  
 木の香が揺れる  
 額に光る一筋の汗  
 炭だらけの顔に  
 白い歯が笑った

か・飾らず  
 真面目で  
 わ・わかるまで  
 粘り強く  
 い・今のことに  
 全力を尽くす

緑に学び  
 緑に汗する河中生

今、君は美しい  
 〈汗〉



(炭焼きに挑戦 — 河合中)

今年の「歩く文化財・文学碑めぐり」は日に恵まれて、晩秋の空には雲ひとつなかった。浄瑠璃姫観月碑、西照寺の家康忌・春の泥の碑と巡ったところ、初めて見るという人が多かった。満生寺では卓池と桃生の話をしている間に、住職が本堂を開いて下さったので、絢爛たる内陣に一同目を見張った。菅生の流れは静かだった。今は幻となった高岩の大正のころの絵図の前で話をしていると、傍ら



で、カセット・レコーダーで記録している人に気がついた。木かげで姫が淵の話をしてる時も、成就院の浄瑠璃姫の供養塔の話の時も、目立たない位置にいて録音して居られた。

安心院の旅寝塚の前で李喬の話をしてる時は、私の近くに來られて録音された。龍海院までの道は狭く、列が長くなって多くの人に語れ

なかつた。歩きつつ傍らの人に鎌倉街道のことなど問わず語りに話すと、件の人はすぐスイッチを入れられた。どういふ方かなと思つたが、尋ねるのも非礼と思ふ歩き続けた。

昼食の予定時刻となり、龍海院で休憩した。寺の好意で観音堂を開放して下さった。色づきはじめて境内の木々を眺めながら昼食をするのも一興とばかり、殆どの人は境内のところどころに適座を

### — 教育随想 —

## 敬 虔

糟 谷 正 孝

見つけて食事をされた。私は観音堂に入っていたとき、本尊様の傍らで風呂敷を解いた。すると先ほどのカセットの人もすぐあとから堂内に入って來られ、私と対称の位置に座をしめ食事を始められた。少し歩いた後の食事は美味しい。

何げなく彼の人を見ると、正座して手提げ袋の中からパンを出して食べ始められた。終始正座のまま静かに食事を続け

られた。胡座をかいた私の足が恥ずかしかつた。誰も見えない室内の少しいすの暗い片隅で、正座を崩さない姿に、私は何かを教えられた思いがした。人品というのはこういう人のことをいうのだと思つた。

食事をすましたその方は、つと立つて本尊様の前に端座され、りんを少し控え目に鳴らされ、小さい声で誦経された。クードウイツサイクヤクシャーリーシーシキと般若心経の語句が途切れがちに聞えた。私は肅然とした気持になつた。

室内には四・五人の女性が輪になつて黙弁つていたが、私だけはその方の静かな敬虔な動作を見つめていた。その時生平の切越の八面塔の夜の供養に、桜井寺の老僧が「天頭様」の祠の前で誦経された心経を思い出した。

私は小さいころ、朝の手水をつかった後東に向つて拍手を打ち、それから神棚に向つて心経を読む父の姿を覚えていた。文化財めぐりの会員の中に、静かで敬虔の人の姿を見たことは小さな驚きであつた。仏様に手を合わせ心を忘れた人が多い現代に、極めて自然に仏前で合掌された人の姿に心が洗われる思いがした。五十をすこし越した位の年輩で小柄な方であつた。どこの誰とも知らない。休憩の三十分の間のことだつた。しかし、その敬虔な姿に淡い光を見たような思いがしたことはいつまでも心に残つた。

(岡崎市教育委員長)

### 個性を生かす

体育指導員

鴨下 智幸



生き生きとした表情で、マット運動の連続技を最終目標とした、単一技習熟段階の授業が展開されている。グループでの学習は、演技を行う者、視点を絞つての見合い、補助者等、誰もが真剣そのものである。

運動技術を指導するうえで、単に技の習得方法の指導で終つてしまふことが多いが、技の完成度に応じた到達目標が資料によって示され、個人の技量による連続技の構成に、生徒各自が考え工夫する姿勢が見られる。ややもすれば単調になりやすい練習の繰り返しだが、熱気を帯びた雰囲気では終了まで続く。

教師の事前の綿密な計画と、指導過程での具体的な指導によりねらい通りの学習が可能となる。

新指導要領では、小中学校とも個性を生かす学習が改善の要点として明示される。今、目前の授業風景には、できない・つまらないという言葉は無縁である。



## 岡崎第九のソリスト

山本みよ子氏

「岡崎第九をうたう会」の練習も盛り上がっている頃、今年で六年連続ソプラノ・ソリストとして歌われる山本みよ子さんのお宅を訪ねた。

山本さんは、名古屋音楽大学の常勤講師・愛知県立芸術大学の講師をされ、名古屋二期会会員としても大活躍しておられる。

梅園小学校の北側の小高い丘に建つ、白い洋風のお宅で、音楽との出会いについて伺った。

「私、城北中学校の第一回目の卒業生なんです。中学二年生で歌をやり始め

たんです。大野先生が『歌をやりなさい』と言ってくださり、三年生の時の担任だった畔柳先生の勧めで歌の道に進むことに決めました。」

と、声楽への道へ進んだ動機を話してくださった。

「中学生時代は、コーラス部の部長をやってましてね、西三河のコンクールに出て、上位に入賞しましたよ。楽しかったです。今では審査員をやっているんですから、ふしぎですね。」

と、当時は思い出され懐かしそうであった。「岡崎第九」との出会いについて伺った。モーツァルトの「ドン・ジョバンニ」というオペラで、外山雄三先生と同じステージに立たれた。その際、

「どうして君を第九のソリストとして使わなかったのかな。」

と言ってくださったそうだ。それと、岡崎市がソリストとして選んだのが偶然重なり、第一回目の「岡崎第九」の出演となった。

「第一回の第九が燃えに燃えて、岡崎市の中で沢山の仲間が増えました。岡崎市で歌うことなどないだろうと思っていましたが、とてもよかったです。」と、こやかに話される。今も歌の輪が仲間の輪が広がっているとおっしゃる。

「月に一回はレッスンに通っています。

自己流になつてしまおうといけませんから、チェックをしてもらいます。アカデミックなところからはずれないように。」

と、教える立場になられても、研鑽を積んでおられるのに感心させられる。三時間ほどのオペラに、一か月くらいをかけた中でも暗譜なさるそうだ。通勤の車の中でも電車の中でも、怠らず楽譜も持ち歩いておられるという。お話を聞いている取材班員には、それはとても苦勞なことだと思えるが、山本さんは、大変だと思つたことはなく、ステージを与えてもらえ、音楽に浸れることが喜びだと語られる。

取材班の質問に、終始、声楽で磨かれた響きのある声で表情豊かに話してくださいました。山本さんの舞台姿を思い浮かべながら月明りの道を帰路についた。

（生年月日 昭和二十三年一月二十九日）  
住所 岡崎市稲熊町四の七十三



## 真のチャンピオン

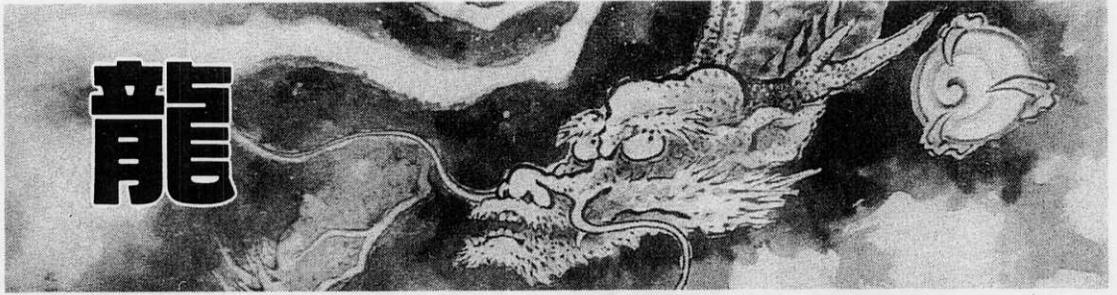
特殊教育指導員

野村 正文

特殊教育部の大きな行事に「子と親の集い運動会」がある。その運動会の最後の種目は、毎年参加者全員によるジャンカである。それは、一人ずつ紙テープを輪にして、踊り曲の切れ目で相手をさがしジャンケンをする。負けたものは勝った人のうしろにつきチャンピオンを決める競争遊戯である。決勝に残ったT君は昨年も決勝戦まで勝ち続けたが、決勝で三百余の人たちの前で負け、ぐずりだした児童である。私は、今年もまた彼が負けてぐずりだすことを期待した。なぜなら彼の本心がストリートに表出されるからである。……負けた。期待どおりにT君は負けた。ところが、T君は、司会者の持つているハンドマイクを取って、「ぼくは、まげちゃったけど、おめでとう。」と、相手を誉めたたえたのである。この一年間のT君の成長の向こうに、両親や担任の先生方の御努力が浮かんでくるようであった。

年一回の市内合同運動会であるが、他校の児童・生徒の成長ぶりを観察できることは、我々教師にとつてかけがえのない機会でもある。





▲巽閣（岡崎公園内）額 橘青雨写 昭2

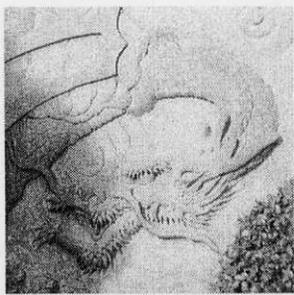
岡崎城を昔「龍の城」とも言い、岡崎は竜との関わりが深い。龍城神社、龍溪院、龍海院、竜泉寺等々、竜の字がつく杜寺、学校、地名もいくつがある。

南方熊楠の「十二支考」によれば、竜は次のようである。

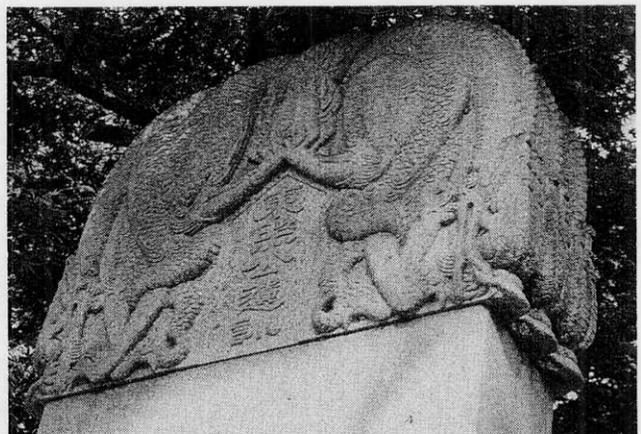
「龍の形に九似あり 頭は蛇に似る 角は鹿に似る 眼は兔に似る 耳は牛に似る 項は蛇に似る 腹は蟹に似る 鱗は鯉に似る 爪は鷹に似る 掌は虎に似る」

岡崎にはどんな竜がいるか。竜を描いた衝立、杉戸、掛け軸、額、彫り物、鋳物などを手掛かりに調べてみるのも興味深い。時あたかも辰年最後の帥走。

市内の著名な杜寺等を訪ね、様々な竜の勇姿や表情を写真撮影した。ここにその一部を紹介し「さようなら辰年」としたい。



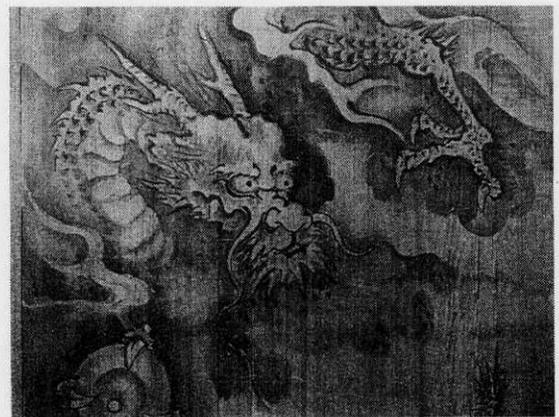
▶ 竜海中 象徴の碑 昭41



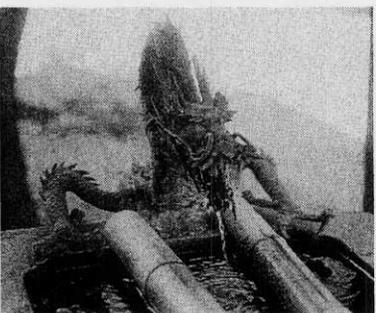
▲ 龍城神社（岡崎公園内）東照公遺訓碑 昭10



◀ 龍溪院（桑原町）本尊を守る竜神様



◀ 龍城神社 衝立 月艇筆



◀ 伊賀八幡宮（伊賀町）手水舎 鋳物



▲ 昌光律寺(伊賀町)障壁画 月傳筆 江戸時代

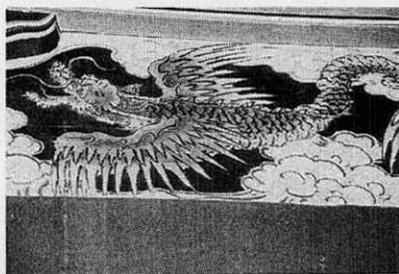
▶ 九品院(鴨田町)掛け軸「龍虎」兆典子筆(中国人)



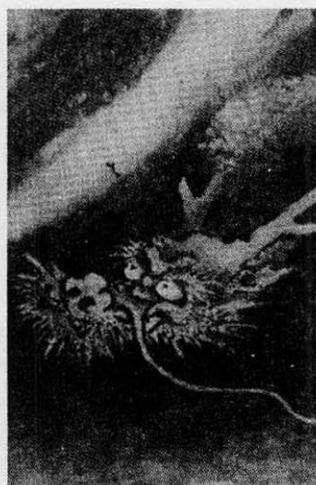
◀ 信光明寺(岩津町)掛け軸「雲龍図」鷲山筆 江戸時代

六所神社(明大寺町)

▼ 板の壁面画「飛龍」 江戸時代



▶ 竜泉寺(中島町)三世尾上梅幸筆 江戸時代 掛け軸「富士起龍図」



◀ 随念寺(門前町)掛け軸「雲龍図」高田敬輔筆 江戸時代



◀ 龍海院(明大寺町)灯籠 昭39



▲ 大樹寺(大樹寺町)賽銭箱 江戸時代

## ぼくが主役だ

男川小 本多 末子

「おはようございます。」

校長先生を見つけると大きな声であいさつのできるA男。

しかし、A男の入級当時は、担任が声をかけても返事ができず、あまりなじみのないものには、突然あばれだしたりした。

そんなA男にも楽しみはあった。教室のうしろにおいてあるトランポリンで運動することである。

五月のある土曜日、交流学級のN先生は、大切な時間をさいて学級の子どもたちをつれてA男の得意なトランポリンの演技を見にきてくださった。



交流学級の子どもたちは、トランポリンの上で、前まわりや高くとびあがるA男の力いっぱい演技におしめない拍手をおこった。

A男にとって、大勢の中で認められるのは、初めての体験であった。この時からA男は変わりはじめた。

本校ではまだ誰も取り組んでいない一輪車乗りに挑戦しはじめたのは、その頃からである。

一輪車の技術は、A男にとって、そうやさしいものではない。くじけそうな気持ちをささえた

のは、いつか交流学級の仲間に分かた一輪車乗りを見せたい、自分を認めてもらいたいという強いねがいであった。

長い夏休みも、雨の日を除き毎日休まず練習に学校へやってきました。A男の進歩のようすを一覧表に記録し、はげましく続けるのが、私の夏休みの日課となった。

交流学級の仲間に発表する日がきた。

大勢の前でA男は緊張していった。スタートで失敗するのではないかと一瞬手を出しかけた私の手をふりはらうように、A男は思いきって走り出した。まるで、A男と一輪車が一体

となったように私には思えた。

「すげえ。」

あざやかなA男の演技に、子どもたちは目を見はり拍手をしつづけた。

山の学習では、食事のあいさつ係を受け持った。

「いただきます。」

百十一人の大勢の前で、堂々と声をはりあげているA男が「ぼくが主役だ。」といっているようにきこえた。



## ハト笛

六南小 三浦 潤一

「どうだった。うまく鳴った。」

「だめ、全然鳴らない。」

「二組は。」

「鳴らない。ちゃんと作ったはずなのに。」

五年生全員で取り組んだ素焼きのハト笛作りのことである。

「なんとかなるだろう。」

などと、たかをくくったのもつかの間、どのクラスからも予想外の悪戦苦闘する様子が伝わってくる。

「先生、音が出ない。」

「手伝って。」

こちらも汗だくでハト笛と取り組む。一つ、二つとようやく鳴らしてはいるが、きりが無い。

そんな時、教室の片隅で「ポーツ」と音が聞こえた。みんな一斉にふり返る。

「Nちゃんだ。」

「Nちゃんが鳴らした。」

N子は学級の女子の中で一番体が大きく、部活動でも中心選手の一人として活躍している。

その体の大きさと力の強さから学級の男子からも一目置かれる存在であるが、見た目に反して恥ずかしがりやで、優しい心の持ち主である。自分が目立つことを嫌い、教室の中でも大柄な体を小さくしておとなしくしている。

そのN子が自分の力で一番に鳴らした。N子を取り囲んでハト笛作りが続く。どうしても鳴らせなかった子もN子が少し直す。「ポーツ」とあたたかい音が出る。どつと歓声が上がった。

「すごい、Nちゃん。」

「ハト笛博士だ。」

その声にN子は土で真っ白になった口もとをゆるめる。

わずか二時間の間にN子が鳴らしたハト笛は七つ八つを数えた。

やがて、全員のハト笛が完成した。N子の協力で鳴らなかつたものは一つもない。

土粘土で作ったハト笛は、その後、素焼きし、彩色して仕上げることができた。

完成祝いにと全員で一斉にハト笛を鳴らした。

「ポーツ」「ポーツ」

いくらかかすれたり、かん高い音がしたりするけれども、やさしくあたたかく響くその音色は、N子そのものであるような気がしてならなかった。



お知らせ



第十六回教育文化賞

三氏・二団体に

岡崎の教育文化振興に貢献した個人や団体のすぐれた業績をたたえる岡崎教育文化賞授賞式が、去る十一月十二日(土)、岡崎市せきれいホールにおいて行われた。

本年度は、個人二十人、団体十一件の推薦があった。選考の結果、次の個人三人と二団体が選ばれ表彰された。

個人

▽内田松夫氏

岡崎女子短期大学講師

基礎・基本を重視した、学習指導理論の確立とその実践指導

▽小森辰雄氏

ポララ

岡崎販売株式会社社長

市内の子供の作品収集・海外

の作品収集など、岡崎市の美術教育振興の向上に寄与

▽酒井久男氏

竜美丘小学校教諭

小中学校吹奏楽部の指導を通して、健全な児童生徒の育成、国際親善、文化の向上に寄与

団体

▽現職教育委員会特殊教育部

代表 部長 林 勝己氏

長年にわたる障害児教育の研究推進に努力して、岡崎市の特殊教育の基盤を確立

▽岡崎市民合唱団

代表 小笠原健治氏

以来十一年、親しまれ期待される音楽会として評価は高く、岡崎の音楽文化の向上に寄与

■ソニー理科教育最優秀校に

美川中学校

昭和六十三年度ソニー理科教育振興資金において、「人間の持つ可能性の開発をめざす教育」と題した美川中学校の論文が最優秀賞に輝いた。

なお、優秀校に大樹寺小、福岡小、矢作北小、努力校に三島小、常磐中が選ばれた。

十一月十七日、東京ソニー本社で表彰された。

■日本視聴覚教育賞論文、文部大臣賞に常磐南小学校

昭和六十三年度、日本視聴覚教育賞に、常磐南小学校が応募した論文「豊かな感性を育てる視聴覚教育」が学校教育部門で見事に文部大臣賞を受賞。十二月五日東京国立教育会館で表彰される。

■学研教育賞に梅園小学校

「子供の主体的な活動を育てる指導法の研究」に取り組んできた梅園小学校の業績が認められ、第三十三回学研教育賞が授与された。

■「体育科教育」募集論文

第一席 山本教諭(竜中)

月刊誌「体育科教育」を発行している大修館書店が、全国から募集した論文で、竜海中 山本照司先生が最高賞の第一席に選ばれた。

■交通事故無事故で十校表彰

教職員の交通安全意識の高揚に資するため、県教育委員会から次の十校が表彰された。

東海中、矢作北中、南中、矢作東小、緑丘小、美合小、広幡小、井田小、常磐東小、愛宕小

■花いっぱいコンクール

昭和六十三年度花いっぱい優良小中学校コンクールにおいて次の三校が受賞した。

優秀賞 (愛知県新生活運動協議会賞)

六ッ美北部小学校

優良賞

福岡小学校

六ッ美中部小学校

六ッ美北部小学校

地域花壇賞

六ッ美北部小学校

■西三河中学校長距離継走大会

岡崎勢大活躍

期日 昭和63年11月19日

場所 県宮岡崎総合運動場

男子 優勝 福岡中Aチーム

三位 東海中Aチーム

四位 竜南中Aチーム

九位 美川中Aチーム

十位 竜海中Aチーム

女子 八位 甲山中 チーム

以上が十二月二十五日長久手青少年公園で行われる県大会へ出場する。

■第15回冬季研修会

◇期日 昭和63年12月26・27日

◇場所 岡崎市少年自然の家

◇講師と演題

☆第一日☆

・「このごろ思うこと」

元岡崎市教育長 鈴木 正弘氏

・「日本語の論理」

お茶の水女子大学教授 外山滋比古氏

・「落語とポランテア」

落語家 古今亭内菊氏

☆第二日☆

・「新聞記者の見た最近の学校」

中日新聞論説委員 前田 弘司氏

・「志賀重昂と「三河男児歌」

国際放映TVノンフィクション班チーフプロデューサー 高林 公毅氏

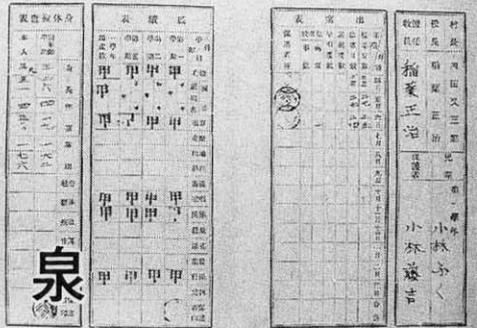
・「授業の腕をみがく」

東京都大田区雪谷小学校 教育技術法則化運動代表 向山 洋一氏

第21回岡崎市中学校新人総合体育大会の成績(追加)

種目	性	優勝	2位	3位	位
軟式野球	男	六ッ美	岩津	城北	新香山
ソフトボール	女	竜海	矢北	東海	南山
バスケット	男	城北	竜南	矢作	竜海
	女	竜南	東海	城北	甲山
サッカー	男	矢北	竜南	岩津	竜海

向山 洋一氏



岡崎市舞木町 鈴木京次氏蔵

# 甲乙丙丁の 通知票

政府は明治五年「学制」を頒布。同十二年、新たに教育令を制定した。岡崎市内においてもこの頃各地に小学校が開校となった。

明治三十一年から評価がつけられるようになり、昭和十六年まで「甲乙丙丁」の四段階で「通信紙」として渡されるようになった。

ここに載せた通信紙は明治十四年四月入学、第一学年のものである。

当時、科目は、一、二年生で

- ・表紙写真
- ・表紙詩
- ・カット

河合中  
河合中  
羽根小

古田 忠久  
原田 和幸  
加藤 直樹

「山中学校 百年史」

参考資料

の五段階となった。

三十二年からは「54321」

E」の五段階となり、二十三年

には「+2+10-12」となって、

戦後二十二年には「ABCDEF」

の三段階となった。

良可」の三段階となった。

戦後二十二年には「ABCDEF」

の三段階となった。



- \*人は死ねばゴミになる 伊藤栄樹 ¥1000
- 新潮社
- \*「耕す文化」の時代 木村尚三郎 ¥1200
- ダイヤモンド社
- \*ごく普通の在日韓国人 姜 信子 ¥1200
- 朝日新聞社
- \*絵の中の女たち 加藤周一 ¥3000
- 平凡社

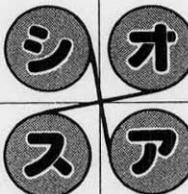
※潔く生きる 櫻木健古 ¥980

PHP研究所  
人間、誰しも、順風満帆の人生を歩みたいと願う。しかし、順調な歩みばかりではない。壁に突き当たるともしばしばあることも承知している。その時、進むことができなくて、「退く」「止まる」「屈する」ことなど余儀なくされることがある。人間「退くこと、即、敗北」と思いがちであるが、そうではない。著者は、潔く退いて、逞しく進むことが必要であると。多くの事例を引用しての積極的人生論である。

幼なじみに会う機会も多くなる年末年始。一九八八年がどんな年だったか。今の教え子たちが何十年かした時、忘年会や同級会でどんな話題を出しているのだろうか。時代をタイムトリップして聞いてみたいものである。

その頃になって今やっていることの一つの評価が出ていると思う。

職員室の花瓶に、野辺に見る薄紫色の花がさしてある。「この花知ってる」の声で、花を囲み「ヨメナかな」「ノコンギクかな」と、触ったり摘んで匂いを嗅いだり、植物図鑑を片手に話に花が咲く。博学でなくてもいい。野辺の花を楽しみ心、常に知ろうとする気配りこそ大切にしたいものである。



後、一月を残して今年も終わろうとしている。そろそろ国や世界の十大ニュースが取り沙汰される時期である。自分自身の今年の十大ニュースをあげるとしたら何になるだろう。自分の歩みを確かなものにするためにも、一年を振り返ってみるのは大切な事だ。ひとつ考えてみよう。

墨の色も鮮やかに雲を巻いて飛ぶ竜の姿が見事に杉戸に浮かび上がっている。市内の著名な社寺を訪れ、竜にかかわるものを見せていただいた。昇り竜、下り竜あるいは翼を持った飛竜がさまざまな表情で描かれていた。雲を呼び、稲妻を放って天を駆ける竜の姿に人々は何を託したのだろうか。